

塚定二郎などの独逸学者たちであった。主な木下訳にはヘルマン・シュールチエ著『国権論』全6冊（明治15）、同『李滯生国法論』（荒川邦蔵共訳、明治15-19）、ローレンツ・フォン・シュタイン著『兵制学』（山脇玄共訳、明治15）アウグスト・ヘフトネル著『万国公法』（荒川共訳、明治17）等がある。いずれも高度な語学力を必要とした。

さて木下は1894（明治27）1月に山形県知事に就任し、地方長官に転身、以後、朝鮮半島の鳳山県知事（明治30）、台中県知事（同31）、埼玉県知事（同35）を歴任した。知事時代の木下は『北茂安村誌』よれば、農業の振興計画とその実践に努力した。山形県ではリンゴの増産に、台湾では柑橘類の栽培に、埼玉県では治水・植林の外、梨の品種改良に力を注いだ。埼玉県の植林では今も「木下知事記念林」といわれるほどの功績を残しているいう。

彼の残した仕事のうち、この知事としての治績と、前述の『国法論』をはじめとする独逸法律書の翻訳は最も評価しなければならないものであろう。

趣味は洋楽、囲碁、将棋などであった。

さて木下は、埼玉県知事を務めた後1905年（明治38）9月4日付で、今度は大分県知事に任命された。だが、大分県は木下の後任として埼玉県知事に転任を命ぜられた大久保利武の任地であった。木下の転任は明らかに左遷であった。彼はこの政府の措置に憤慨し、赴任を拒否し、神奈川県鎌倉市の腰越にある別邸に引き上げた。「性格は剛直清廉で、かつて一言の不平もなかったことがない。しかし理論にたがえば、上司といえども苛責せず追求したのである」（『北茂安村誌』）と評せられた彼の行動様式はここでも発揮されたのである。だが、彼はまもなく病を得てその地で亡くなった。1907年6月6日付『埼玉新聞』に次のような死亡記事が掲載された。

「○木下前本県知事の逝去 前本県知事木下周一氏は昨年来肺患を以て相州腰越の別邸に加療中余病併発して昨今危篤なりし事は既記の如くなるが遂に去る四日同地に於て永眠せり享年五十有七葬儀は明七日午後二時東京青山墓地に仏式を以て執行する都合なりと云ふ」

なお現在、青山霊園の「1種イ6号3側2番」に建つ「従三位勳二等木下周一墓」の裏面には「明治四十年六月二日薨享年五十九」とある。

ベルツの来日と相良元貞

明治の御雇い外国人の中で最も著名な一人で、人々に深く尊敬されたドイツ人内科医エルヴィン・ベルツ（1848-1915）の来日（明治9年6月）のきっかけは、当時ライプツィヒ大学に留学中の日本人を診察したことにあるとされている。その日本人とは佐賀藩出身の相良元貞（げんてい／もとさだ、1842-1875）のことであり、彼はまた明治政府がドイツ医学を採用するに至る過程で、兄の相良知安を通じて何らかの影響を与えたと考えてもよからう。

佐賀藩鍋島閑叟の家臣で、才力が非凡で勤勉家だった相良元貞は、明治2年大学中助教兼大舎長に任じられ、翌年早くも東校（東京医学校の前身）留学生（池田謙斎、長井長義、大沢謙二、木脇良太郎ら計9名）として政府より医学修業（病理学）のためドイツに派遣された。ベルリン大学に入学したのは1871年（明治4）10月4日で、以後74年（明治7）9月24日退学す

るまで計6学期学び、次いでライプツィヒ大学転学した。同大学に学んだ日本人は同じ佐賀藩出身の木下周一に次いで2番目であった。同大学公文書館の記録によると、相良は1学期(1874年10月19日より75年3月15日まで)在学した。住所は大学に程近い天文台街22番地。だが不幸、ドクトルの学位を獲ようとした矢先病気に罹った。そこにベルツとの出会いが訪れる。

ベルツはシュツットガルトのエーベルハルト・ルートヴィヒ高等学校を優秀な成績で卒業すると、1866年チュービンゲン大学医学部に入学した。彼は基礎医学を修了した時点で、ドイツの医学生への伝統にならぬ他大学へ転学した。転学先としてライプツィヒ大学を選んだのは、彼と同じシュワーベン人で内科学の教師としてドイツで最も有名だったカール・ヴンデルリッヒ教授に就いて学ぶためだった。ヴンデルリッヒの医学者としての態度は、ベルツのその後の医師としての在り方に深い影響を与えることになる。ヴンデルリッヒの最大の功績は臨床における体温測定の意義を確立したことにある。

1870年の普仏戦争にベルツは軍医助手として従軍したが、平和が回復するとライプツィヒ大学に復帰し最優秀の成績で卒業した。1872年(明治5)4月同大学病理解剖学研究所の助手となったが、まもなくヴンデルリッヒ教授の内科医局に移った。その後の4年間はベルツの医師として天稟の能力が顕著に現れた。人道的態度と、患者の幸せを願う心、それに卓越した教育家的素質である。これにより患者は彼に感謝し、学生も深く彼に心服した。師に代わって担当した講義は学問的であると同時に明快で多くの学生を引きつけた。かくしてドイツにおいて学者として将来を約束されていた。だが、全く予想していなかった日本行き決心することになる。それは大学病院に入院した日本人を診察したことが契機となった。ベルツの息子トクは、父ベルツの日記の序文で次のように述べている。「1875年(明治8)に父はある日本の役人を診察することになった。治療が続く間にベルツは患者の母国である日本への関心を強めていったので、患者は、日本へ行って情報を自分で直接入手する気はないかと尋ねた」。するとベルツは即座にそうしたいと答えた。それで患者は本国の官庁へ彼のことを熱心に推薦したという。この日本人の患者こそ相良元貞と見てよい。役人と見なされたのは彼が大学中助教兼大舎長だったからではあるまいか。1875年当時ライプツィヒ大学に留学中の日本人は、在学者名簿によると木下周一、相良元貞、平田東助、山脇玄の4人しかいない。このうち木下、平田、山脇は法律専攻で帰国後ドイツの法律書の翻訳紹介で大きな功績のあった人たちであるが、奇しくも同じ1849年(嘉永2)生まれ。留学中に病気などした気配は全くない。それどころか、木下は1907年(明治40)に亡くなったが、他の二人は1925年(大正15)まで生きていた。これに対して相良の病状は悪かったようだ。「死毒に罹り更に肺患を併発」(『明治過去帳』)して帰国しなければならなくなった。結核は医学の進んだドイツでも有効な治療法はまだなかった(コッホによる結核菌の発見は1882年のことである)。相良の退学証は1875年4月16日付で発行されているので、その後まもなく帰国の途に就いたと思われる。ベルツはどんな思いで見送ったことか。ベルツは翌年76年(明治9)1月3日、ベルリンにおいて青木周蔵公使の立ち会いのもとで日本政府の招きに応じ、官立東京医学校教師の契約書に署名した。そして同年4月ドイツを出発し、6月に横浜に到着、6月10日から医学校で講義を開始した。だが、その時相良は既にこの世になかった。彼は前年帰国後まもなくして10月16日に東京にて他界していた。享年35。その早い死は大変惜しまれた。「造物の才を厄する何ぞ其れ酷なるや天若し斯人をして年を仮さ

は豈^{あにただ}奮^{ふん}靡^みを起し骨に肉するのみならんや後進の仰いで以て泰斗と為すの期も亦将に爰^{こゝ}に在らんとす。今や不幸にして其学ぶ所の什一を試むる能はずして館^すを捐つ。歎^{たん}惜^{せき}の情に堪えざるなり(郵便報知新聞)」「(『明治過去帳』より)。

実兄の相良知安(1836-1906)は、明治初年に政府顧問オランダ人大尉フルベッキ、岩佐純らと謀り独逸医学の優秀性を熱心に説いて、政府にその導入を建白したことで知られている。政府はそれを受けて独逸医学の採用を決めた(正式には明治3年2月15日)。このような過程で元貞は兄を通じて間接的に影響を与えたことは十分に考えられる。ともかく1870年(明治4)8月にはドイツ人軍医(レオポルト・ミュラーとテオドル・ホフマン)が東校に着任し、日本政府との約束に従い直ちに東校の抜本的改革を行い、全くドイツ式の医育制度を採った。以後ドイツから多くの医学者が招聘されたが、その最大の存在がベルツであった。

結論として相良元貞は志半ばで倒れたが、ベルツの来日のきっかけとなるなど、意義ある生涯だった。

ライプツィヒにおける緒方正規

1880年(明治13)7月、東京大学医学部を卒業した緒方正規(1853-1919)は医学士の学位を受け、大学雇となり病院に勤務したが、同年10月25日付で文部省より生理学及び衛生学の研究のために3年間のドイツ留学を命ぜられた。師のベルツの勧められて最初ライプツィヒ大学を留学先に選んだ。同大学はベルツが来日前に講師として勤務していたところ。出発は11月14日でベルリン大学に留学する小金井良精(人類学者)と同船だった。

以下、主としてライプツィヒ大学の文書館所蔵史料によって事実関係を記しておきたい。「日本の熊本出身の緒方正規(緒方は自分の生年を1855年と記している)」が入学登録したのは1881年(明治14)4月25日である。在学期間はこの日から1883年(明治16)3月15日までの4学期2年間であった。住所はタール・シュトラセ31番地の3階(Thalstr. II)。ここには地質学研究のために留学した理学士の小藤文次郎も住んでいた。

緒方が受講した授業は次の通りである。

夏学期(1881)

生理学(ルートヴィヒ教授)

臨床講義(ワグネル教授)

化学実習(ドレックセル教授)

冬学期(1881/82)

生理学(ルートヴィヒ教授)

臨床講義(ワグネル教授)

生理化学・化学実習(ドレックセル教授)

生理学実験法(ガウレ博士)



緒方正規